

西洋の「もの」の考え方の歴史

第3回 日本産学フォーラム リベラルアーツ企業研修会

2019年9月17日(火) 18:30～22:00

大手町サンケイプラザ 310

瀧一郎(大阪教育大学)

講演要旨

「西洋の「もの」の考え方の歴史」
西洋哲学の歴史を概観しながら、
古代における原子論(atomism)の発生から
近代における個人主義(individualism)の成立をへて、
グローバリズムの3規範(特に科学技術)がいかにして
形成されてきたかを考える。

目次

序 「もの」の考え方

1 ヘレニズム(古代) 善一者論

a 原子論 デモクリトス

b 「魂の世話」 ソクラテス、プラトン、アリストテレス、プロティノス

2 ヘブライズム(中世) 存在論

a 創造 『創世記』

b 時間

3 原子論から個人主義へ

結 「愛」に生きる

「もの」

もの(物)

- 1 空間のある部分を占め、人間の感覚でとらえることのできる形をもつ対象。〔物質的なもの〕
- 2 人間が考えることのできる形のない対象。〔精神的なもの〕

「神の異称。人にまれ、何にまれ、魂となれる限り、又は、霊ある物の幽冥に属(つ)きたる限り、其物の名を指し定めて言はぬを、モノと云ふより、邪鬼(あしきもの)と訓めり。又、目に見えぬより、大凡に、鬼(『万葉集』740「鬼(もの)」)、魂(『伊勢物語』第23段「魂(もの)」)を、モノと云へり」
(大槻文彦『大言海』富山房, 昭和10年)

「もの」の考え方: 人生観・世界観・自然観

「もの」と「こと」

全	形而上	根	もの	幽	奥
個	形而下	顕	こと	顕	口

(鈴木重雄『幽顕哲学講話』平凡社, 昭和19年)

原子論

ソクラテス以前の哲学

- ・パルメニデス (Parmenides, BC515ca-BC445ca)

「在るもの to eon は在り、在らぬもの to me eon は在らぬ」

「思惟することと存在することとは同一である」実在は思惟とロゴスによって捉えられる。
在るものは、不生不滅、不可分、不変不動であって、完全な球に似ている。

- ・レウキッポス (Leukippos, BC470ca-) 原子論の創始者

デモクリトスの質的差異をもつ「種子 sperma」(物活論 hylozoismus) →
レウキッポスの量的差異しかない「原子 atomon (不可分なるもの)」

- ・デモクリトス (Demokritos, BC460ca-BC370ca) 原子論の大成者

「甘いといい、辛いといい、熱いといい、冷たいといい、また色彩といい、それらはすべて
ノモス (習慣・約束事) のうえのことにすぎない。実際にはただ諸原子 atoma と空虚 kenon
があるのみ」(断片9)

在らぬものが在る

万物の根源 arche は不生・不滅・不変のアトムである。これは数において無限であるが、
形態と位置によって互いに異なっていて、空虚 (空間) のなかを運動しており、その離合集散によって見かけ上の性質や変化が出てくる。

パルメニデスの真実在が「物」に変貌している。

哲学とは何か

哲学 (philo-sophia＝知への愛)＝「魂の世話 epimeleia tes psyches」

ソクラテス (Socrates, BC470/469-BC399)

神託「ソクラテス以上の知者はいない」

「無知の知」「知者を名のる者」ソフィスト⇔「知を求める人」ソクラテス

「彼らも自分も、善美 (kalon kagathon) にかかわる重要事について何も知っていない。

しかし彼らは「知らないのに、知っていると思っている」のに対して、自分は「知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている」。このちょっとした違いで、自分の方がより知者だということになるらしい。そしてこれが、神ならぬ人間に望みうる精いっぱい知なのだ」(Apologia, 21d, 23a-b)

「死を知っている者は誰もいないのに、人びとはまるで死が最大の害悪であるとよく知っているかのように、死を恐れる。これこそ、「知らないのに知っていると思う」という、最も不面目な無知にほかならない。私は、あの世のことはよく知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている。」(29a-B) →「だから自分は死を恐れないのだ」

「世にもすぐれた人よ、君はアテナイ人であり、知と強さにおいて最も偉大な、最も名の聞こえた国の一員でありながら、金銭をできるだけ多く得ようとか、評判や名誉のことばかりに汲々としていて、恥ずかしくないのか。知と真実のことには、そして魂をできるだけすぐれたものにすることには無関心で、心を向けようとしないのか」(29d-e)

「何よりも大切にしなければいけないのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということである」(Crito, 48b) 「善く」＝「美しく」＝「正しく」

「死にのぞんで嘆き悲しむ人を君が見たら、それは、その人が実は、知の愛求者 (philosophos)ではなく、身体の愛求者 (philosomatos)だったことの十分な証拠ではないだろうか。そしてその同じ人は、金銭の愛求者 (philochrematos)でもあり、名誉の愛求者 (philotimos)でもある——そのどちらかであるか、両方であるかだろう」(Phaedo, 68b-c)

身体の愛求者＝金銭の愛求者＝名誉の愛求者
知の愛求者

人生観→世界観・自然観

「(身体を愛してきた者の魂は)「物(soma, corpus)」的な性格のもの——すなわち、触れたり見たりできるもの、飲み食いできるもの、性愛のために資することのできるもの——ただそのような存在だけが真実のものだと思いこみ、他方、肉眼には隠されてある不可視のもの、思惟されるだけのもの、哲学(求知)によってこそ捉えられるもの〔イデアと魂(psyche, anima)〕は、これを嫌い、恐れ、逃げるように習慣づけられている」(Phaedo, 81b)

→デカルト『方法序説』第4部

「しかし、多くの人が、神を認識することにも、自分たちの魂(ame)が何であることを認識することにさえも困難があると思込んでいる。どうしてそうなるかというと、それはかれらが自分の精神(esprit)を、感覚的な事物を越えて高めることがけっしてないからである。かれらはイメージを思いうかべてでなければ何も考えない習慣にとらわれてしまい——これは物質的事物(les choses materielles)に特有な思考法だ——、イメージを思いうかべられないものはすべて、かれらには理解できないと思われるからである。」(谷川多佳子訳)

プラトン哲学の基本構図

- 「生き延び」原理
- 「ただ生きること」
- 身体・金銭・名誉を志向
死を恐れ、延命を願う。
- 生物的生存への有効性
(効率性・利便性・快適性)を
求める。
- 「物」の局面にのみ着目する
自然観
- 「精神」原理
- 「よく生きること」
- 知・真実・魂の卓越性を希求
死を恐れず、延命を願わない。
- 人間としてのトータルな価値
(善)を求める。
- 「意味」と「価値」と「生命」を
基本にする自然観

〔⇒科学技術の推進〕

〔⇒哲学の後退〕

虹の哲学

虹のさまざまな色合いについて哲学する二つの仕方

第一の方法(唯物論的方法)

・赤い色の赤らしいところ、青い色の青らしいところ、黄色の黄色らしいところを捨象していつて、ただの色という空虚な抽象的観念に到達しようとする方法

・個々の色合いの差異を消去して、暗黒の暗闇のなかにすべての色合いを溶解させるような否定的な方法

〔⇒すべての色の絵具を混ぜ合わせると黒くなる。〕

第二の方法(靈性論的方法)

・「青・紫・緑・黄・赤の何干という色合いをとり、これらに凸レンズを通過させることによって、同一の点に集中させる」方法

・この世界にあっては多くの色合いに分散した形で知覚されていたものを、かの世界において不可分の多様性の統一である純粋な白い光として直観しようとする方法

〔⇒すべての色の光を混ぜ合わせると白くなる。〕

「形而上学の目的は、個別的な存在者の一つひとつに固有の色合いを与えながら、そのことによって存在者を普遍的な光に結びつけている特殊な光線を、個別的な存在者のなかで捉え直し、この光線を発出する元の光源にまで遡ることである。」

(ベルクソン「ラヴェッソンの生涯と業績」『思想と動くもの』河野与一訳, pp. 356-357)

「普遍性や一般性の意味に関するかぎり、.....ラヴェッソンの解釈にもとづいてアリストテレスの方法を説明した[ベルクソンの]これらの言葉は、皮肉にもむしろ、.....プラトンのイデア論的思想に、よくあてはまる面をもつ」

(藤澤令夫『プラトン『パイドロス』註解』岩波書店, 1984, pp. 53-54)

アリストテレス哲学の基本図式

(1) 学問の区分

他ではありえぬ・必然的(ouk endechetai allos echein)

「見ること」(理論theoria)⇒自然学・数学・神学(←知恵sophia・認識episteme・知性nous)

他でもありうる・偶然的(endechetai allos echein)

「行うこと」(実践praxis)⇒倫理学・政治学(←思慮phronesis)

「作ること」(制作poiesis)⇒制作学(←技術techne)

(2) 事物の原理・原因

・すべての存在をその質料(hyle, materia, たとえば青銅)と形相(eidos, forma, たとえば像型)との結合体として具体的に捉え、

・すべての生成と運動をその可能態(dynamis)から現実態(energeia)への移行・発展として捉えようとした。

(3) 主語・述語＝実体・属性

「SはPである」＝「PはSの述語となる」「PはSに属する」

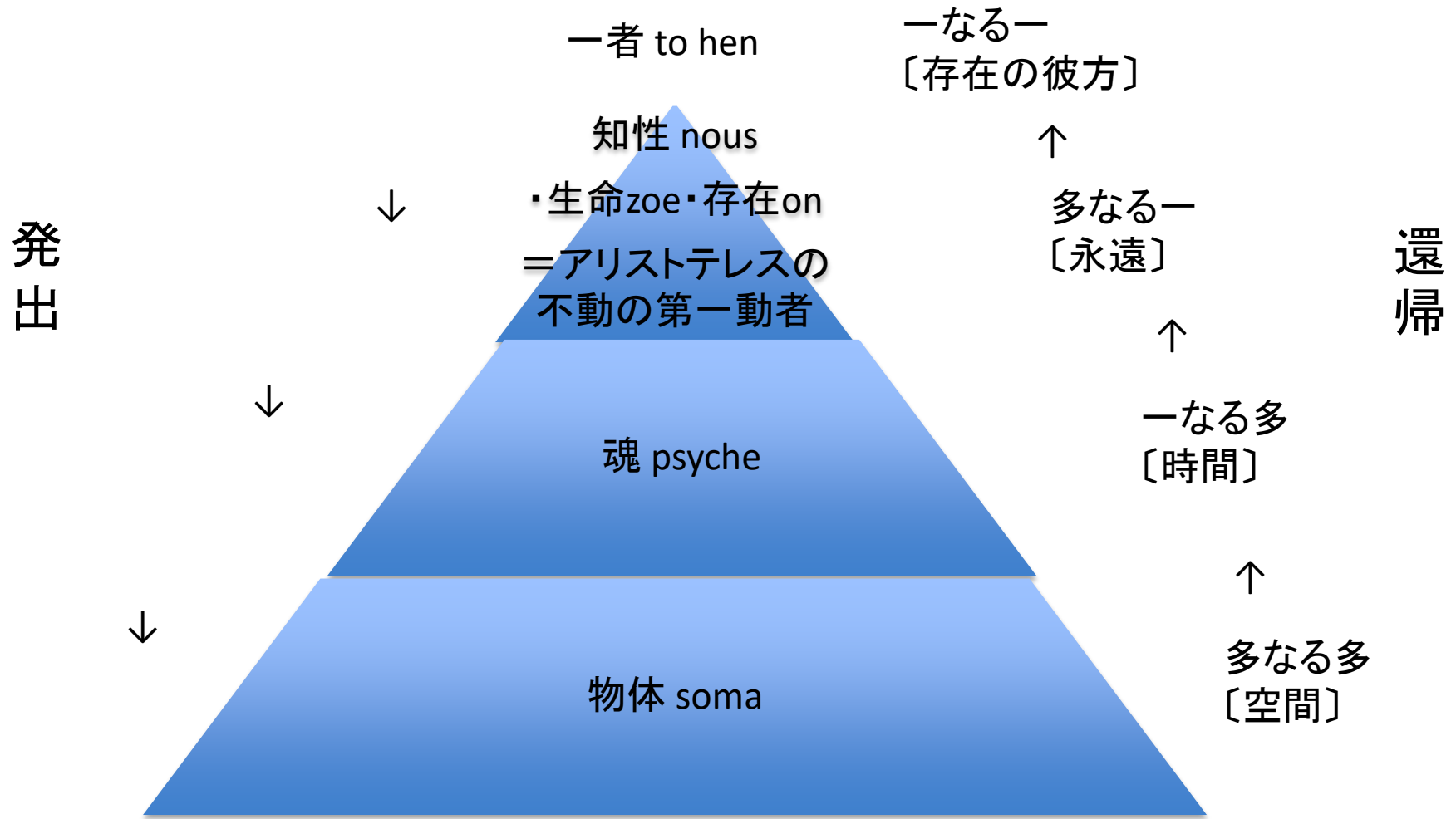
原子論の世界像に哲学的な根拠を与える。

(4)

エネルギー＝靈魂psycheの活動 目的が内在している行為、現在＝完了

キーネーシス＝物体soma の運動 「物があって、それが時間・空間のなかで動く」

プロティノスの発出・還帰構造



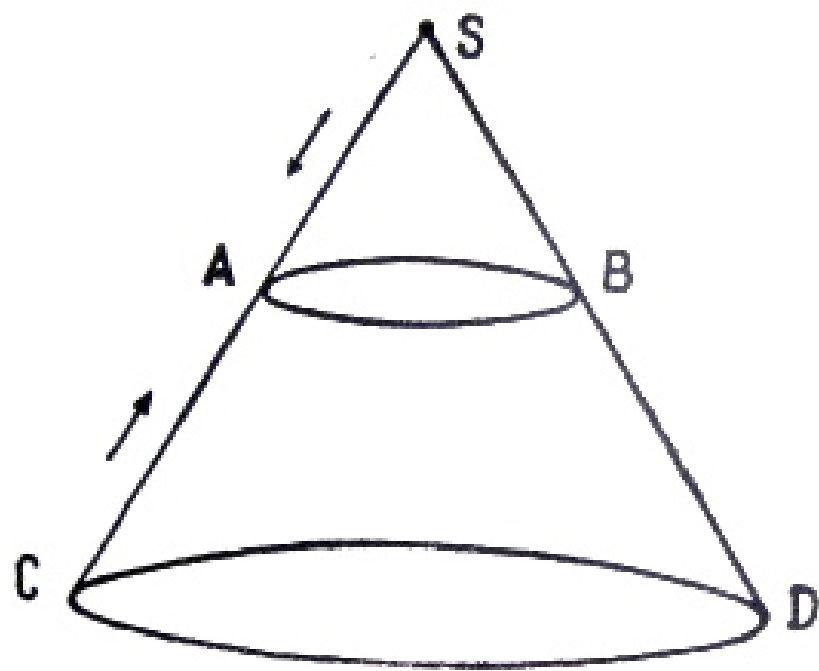


Fig. 1.

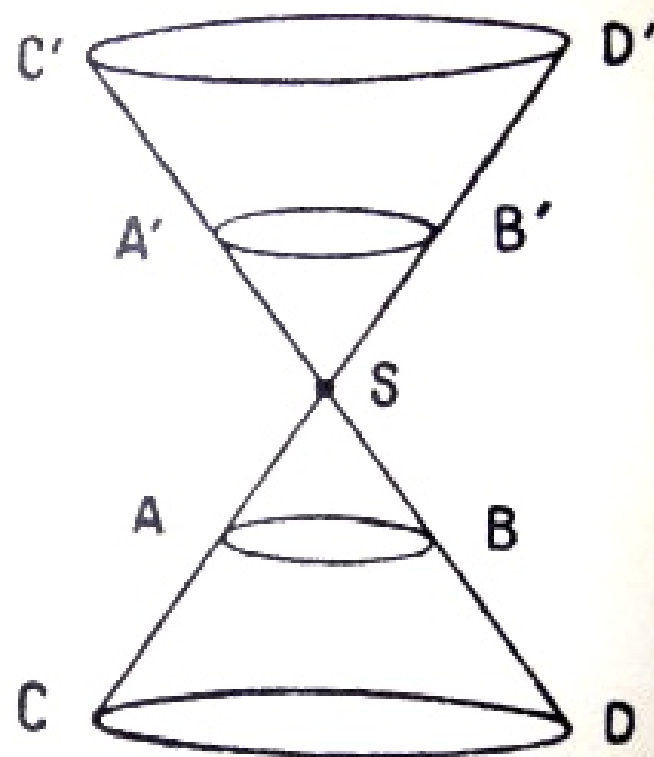


Fig. 2.

ヘレニズムとヘブライズム

古代ギリシアの思想
(ギリシア・ローマの哲学的伝統)

存在に対する
善 (agathon, bonum) の優位の思想
＝「善一者論agatho-henologia」

- ・プラトンにおける「分有」
- ・感性的世界は下降によって生じる。
- ・制作：周辺から中心へ、多から一へ
「物質」から出発する多の結合
- ・デミウルゴスによる制作
- ・靈魂psyche-肉体somaの二元論(二律背反)
「肉体somaはわれわれの墓場semaである」
- ・感性的なものは悪
- ・個体化は物質による。

西洋中世近現代の思想
(ユダヤ=基督教の宗教的伝統)

善に対する
存在 (einai/on, esse/ens) の優位の思想
＝「存在論ontologia」

- ・聖書における「創造」
- ・感性的世界は上昇によって生じる。
- ・創造：中心から周辺へ、一から多へ
「統一」から出発する一の分割
- ・神による創造
- ・靈ruah, pneuma-肉basar, sarxの弁証法
ヘブライ語には「肉体・物質」という語がない。
- ・感性的なものは善、悪は靈的なもの
- ・個体化は創造による。

1初めに、神は天地を創造された。 2地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。 3神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。 4神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、 5光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。 6神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」 7神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。 8神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。 9神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。 10神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。 11神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。 12地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。 13夕べがあり、朝があった。第三の日である。 14神は言われた。「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。 15天の大空に光る物があって、地を照らせ。」そのようになった。 16神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。 17神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、 18昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。 19夕べがあり、朝があった。第四の日である。 20神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」 21神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。 22神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」 23夕べがあり、朝があった。第五の日である。 24神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。 25神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。 26神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」 27神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。 28神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」 29神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。 30地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。 31神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

民主主義

民主的な世紀には、人は誰でも自分自身の中に信仰を求めることを私は明らかにした。そうした世紀には、また、誰もがあらゆる感情を自分一人に向けるということを示そう。

個人主義は新しい思想が生んだ最近のことばである。われわれの父祖は利己主義しか知らなかった。

利己主義は自分自身に対する激しい、行き過ぎた愛であり、これに動かされると、人は何事も自己本意に考え、何を措いても自分の利益を優先させる。

個人主義は思慮ある静かな感情であるが、市民を同胞全体から孤立させ、家族と友人と共に片隅に閉じこもる気にさせる。その結果、自分だけの小さな社会をつくって、ともすれば大きな社会のことを忘れてしまう。

利己主義はある盲目の本能から生まれ、個人主義は歪んだ感情というより、間違った判断から出るものである。その源は心の悪徳に劣らず、知性の欠陥にある。

利己主義はあらゆる徳の芽を摘むが、個人主義は初めは公共の徳の源泉を涸らすだけである。だが、長い間には、他のすべての徳を攻撃、破壊し、結局のところ利己主義に帰着する。

利己主義は世界と共に古い悪徳である。ある形の社会の中に多くあって、他の社会には少ないというものではない。

個人主義は民主的起源のものであり、境遇の平等が進むにつれて大きくなる恐れがある。

(トクヴィル『アメリカのデモクラシー』第二巻(上)松本礼二訳, 岩波文庫, 原著1840, p. 175-176)

それ故、人類はずっと後になって初めてデモクラシーに到達したことがわかる(なぜならば、奴隷制度の上に建設され、こうした根本的不正によって最大最難の諸問題から免れていた古代の都市国家は、擬似デモクラシーだったからである)。実際、デモクラシーは、あらゆる政治構想のうちで、自然から最もかけ離れたものであり、「閉じた社会」の諸条件を少なくとも志向的に超越する唯一の構想である。デモクラシーは人間に不可侵な権利を賦与する。こうした権利が侵害されずにいるためには、すべての人々が義務に対して不変の忠実さを示すことが是非とも必要である。それ故、デモクラシーがその内容として取り上げる理想的人間とは、自分自身と同様に他人を尊敬し、自分が絶対的だと見なす責務に忠実であり、もはや義務が権利を授けるのか権利が義務を課すのかわからないほどに、この絶対的なものよく合一している、というような人間である。このように定義された市民(le citoyen)は、カント流に言えば、同時に「立法者にして臣民」である。それ故、市民の総体、すなわち、人民(le peuplenin)が主権者である。こういうのが理論的デモクラシーである。それは自由(la liberté)を宣言し平等(l'égalité)を要求する、そして、この敵対した二人の姉妹を、彼女たちに姉妹であることを想起させ、同胞愛(la fraternité)をすべての上に置くことによって、和解させる。こうした角度から共和政治の標語を考察すれば、自由と平等との間のしばしば指摘された矛盾は、同胞愛によって止揚されるものであり、同胞愛こそ必須のものであることがわかるだろう。そこからして、デモクラシーは福音書的本質のものであって、愛(l'amour)を動因としている、とすることができよう。

(ベルクソン『道德と宗教の二源泉』平山高次訳, 岩波文庫, 原著1932, p. 346)

科学・技術

近代自然科学的な思考の由来

デモクリトスの原子論＋アリストテレスの実体・属性のカテゴリー

原子論の継承

- ・エピクロス (Epikouros, BC342/341-BC271/270) 原子の落下運動におけるパレンクリシス
 - ・ルクレティウス (Lucretius, BC94ca-BC55ca) 『物の本質について *De Rerum Natura*』← *physis*
 - ・ルネサンス以降の復興
 - ・ガッサンディ (Gassendi, 1592-1655) による機械論との結合
- Cf. デカルト (Descartes, 1596-1650) との論争

二元論

substantia cogitans (思惟する実体) = mens (精神)

substantia extensa (延長ある実体) = corpus (物体)

「わたしは一つの実体であり、その本質ないし本性は考えるということだけにあって、存在するためにどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない。したがって、このわたし、すなわち、わたしをいま存在するものにしている魂は、身体〔物体〕からまったく区別され、しかも身体〔物体〕より認識しやすく、たとえ身体〔物体〕が無かったとしても、完全に今あるままのものであることに変わりはない」

(デカルト『方法序説』谷川多佳子訳, 第4部)

古代における「物活論 *hylozoïsme*」と「原子論 *atomisme*」

→近代における「力動論 *dynamisme*」と「機械論 *mécanisme*」

原子論から個人主義へ

自然における原子(atom) → 社会における個人(individual)

個人は(体のように)他から動かされるものか、(魂のように)自らを動かすものか？

→皆と同じ大衆としての個人 民主主義における大衆迎合、大衆煽動

個人は自己同一的な存在(デモクリトス)か、自己矛盾的な存在(エピクロス)か？

→スミスからリカードにいたる個人主義的立場にたつ資本主義経済学への批判

個人は原子(atom)か单子(monade)か？

原子＝物質的な最小単位

单子＝非物質的な単一体

- ・裸の单子(monade toute nue) 無意識的表象(perception)
- ・心(靈魂âme, âme sensitive) 意識的表象(apperception)
- ・精神(esprit, âme raisonnable) 一般的な認識(raison)

→心霊学(la science psychique)の可能性